
命の大切さ

啓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命の大切さ

【Zコード】

Z3580D

【作者名】

啓

【あらすじ】

一人の女性が、死のうと考えて自殺を試みたが、天才医師のおかげで命が助かり、女性は医師を怨むが、その医師に命の大切さを教えられ、自殺をするのを諦める。

私は生きているの？ここは死なのだらう。私は周りを見渡した。どうやら私はベッドの上で寝ている。ここは病院なのだらうか？私が考えていると、ドアをノックするような音が聞こえてきて、誰かが部屋に入ってきた。看護師さんのようだ。私は、ここが病院であることに間違いないと思った。看護師さんは私に近づき、声をかけてきた。

「良かった！きがつかれたみたいですね。私は医師に連絡します。また、すぐに戻って来ますから。」

看護師さんはそう言ひると、慌てて部屋から出て行った。私は頭がボーリとする中で、もう一度周りを見渡した。部屋には花が置いてあり、窓の外はきれいな青空が広がっていた。私が外の景色を見ていると、またドアをノックする音が聞こえてきて私は「はい。」と返事をした。ドアが開き、先ほどの看護師さんが入ってきて、その後ろから男の人が入ってきた。たぶん、看護師さんが言っていた医師なのだろうと私は思った。看護師さんと医師が私のベッドの横に立ち、医師が私に話しかけてきた。

「気分はどうですか？どこか痛いところはありますか？」

私は医師の顔を見て、「大丈夫です。」と言った。医師は頷くと、また私に質問した。

「あなたは、何故ここにいると思いますか？」

私はうつむき、考えているような素振りをした。私の考える姿を見た医師は、それ以上は聞かずに部屋から出て行つた。私は顔をあげて看護師さんを見た。

「私は生きているんですね。どうして死なずに済んだんでしょうか？」

看護師さんは、私を見て笑顔で答えてくれた。

「それは、ここが名医のおかげですよ。確かに、あなたは本当なら

死んでいたかもしだれませんが、発見されたのが早かつたので助けられたと先生は言つておられました。さあ、もう少し休んでいてください。また、後で来ますね。」

そう言つて、看護師さんは部屋から出て行つた。私は看護師さんが出て行つたあと、あの日の事を思い出した。あの日、私は自殺しようと決意して五階建てのビルの屋上から飛び降りた。そう、私は生きることに疲れてしまったのだ。いろいろと嫌な事があった。仕事ではいつも、朝から夜まで働くが失敗ばかり、仕事のことを忘れるために、恋をするが告白しても断られてしまう。私は自分が嫌になつてきていた。仕事で疲れているから、少しでも安らげる空間が欲しくて恋をしたいのに、断られては安らぐどころか、心に大きな穴が開いたみたいになつてしまつ。そんな自分に呆れて、ここで人生を終わらせようと、ビルから飛び降りた。でも結果的に、私は死なずに生き残つてしまつた。これは私にもつとつらい思いをしろといふことなのだろうか？私は死にたかった。死んで何もかも終わらせようと思つていたのに、助けてほしくなんてなかつたのに…私が悩んでいいると、ドアをノックする音が聞こえてきた。私が「どうぞ」と言つとドアが開き、少し若い感じの男の人人が入つてきて、私に声をかけてきた。

「どうも。医師の佐伯秀です。あなたの手術を担当した者です。」

男は笑いながら言つた。私は、少し溜息をつき小さな声で言つた。

「あなたが、私を助けてくれたんですか。死にたかった私を…」

私は佐伯先生を見て言つたが、佐伯先生は笑顔のままだった。私は佐伯先生が、少しでも戸惑うような感じを見せると思つていたのに、佐伯先生は笑顔だったので、私が逆に戸惑つたような顔をしてしまつた。そんな私を見て、佐伯先生は言つた。

「僕がそんな事を言われたぐらいで、動搖するとでも思つていたんですか？言つておきますが、あなたのような人を数えきれないぐらい助けてきました。僕も最初は、あなたのように言われた時は驚きましたが、それもだんだん慣れてくるんですよ。あなたは、まだい

い方ですよ。中には怒って、その場で死のうとしたりする人がいましたから。まあ、この話はこれぐらいにしましょう。今日来たのは、あなたが目を覚ましたと聞いて挨拶に来ただけなので。それでは、僕は失礼します。」

佐伯先生は、そう言つと部屋から出て行つた。私は部屋から出でいく佐伯先生を睨んだ。私は佐伯先生に、「あなたの自殺の理由など、たいした事がない」と言われているように感じた。私が死にたかった理由が、あなたに分かるはずがないし、私より不幸な人なんているはずがないと思った。あなたが、私の何を知っているの！何も知らないいくせに、勝手な事を言つて！私がイライラしたまま、夜が迎え朝になつた。私はあまり眠れなかつた。佐伯先生の事をずっと考えていたので、ほとんど寝ていなかつた。昨日と同じように、私はイライラしていた。今日も、佐伯先生が私の部屋を訪ねてきた。私は佐伯先生の顔を見た瞬間に「何ですか？」と怒り口調で言つた。だが、佐伯先生は笑顔で私を見て言つた。

「今日は怒つているみたいですね。僕があなたを助けたからですか？それとも違うことですか？」

私は、佐伯先生の落ち着いた口調と笑顔に腹が立ち、怒り口調で佐伯先生を睨んでいた。

「ええ！あなたが私を助けたことにも怒っていますが、昨日のあなたの態度、一番腹が立ちます！私の死にたかった理由が分かっているかのような、あの態度が！」

私は佐伯先生を睨んだまま、目をそらさなかつた。佐伯先生から笑顔が消え、真面目な表情になつた。

「そうですか。僕の昨日の態度が気に入らなかつたのなら謝ります。すみませんでした。ですが、僕はあなたが死にたかった理由を分かっているつもりですよ。今、あなたは自分より不幸な人はいないと思つているでしょう。それは間違いです！あなたより不幸な人は沢山います。生まれてからすぐに親を亡くし、孤児院で親の温もりを知らないまま育ち、社会に出て仕事をするが、会社をクビになり、

仕事がなくなつた事により、生活していくために借金をする事になり、仕事を探すが中々仕事が見つからず借金が膨らむばかりで、もう死んで樂になつてしまおうかと思つても、諦めずに働き借金を返し、今では名医にまでなつた人もいるんですよ。」

私はその話を聞いて驚いた。明らかに、佐伯先生は自分の過去の話のように聞こえてくる。それでも、私は佐伯先生に言った。

「あなたが、どんな過去を持つていようとも、私は死にたいんです。もう逃げたいんですよ！」

佐伯先生の顔が怒つているような表情に変わった。

「いい加減にしなさい！あなたは自分の命をなんだと思っているんですか！あなたの命は自分だけのものではないんですよ！お母さんやお父さんの命でもあるんですよ。何のためにあなたを育ててくれたと思っているんですか！あなたに死んで欲しい人など誰もいません。あなたが死ぬことにより、悲しむ人がいることを考えないのですか！僕は、あなたのように簡単に死ぬと言つ言葉を使う人が、一番腹が立ちます。あなたは本当に不幸だつたんですか？よく考えてみてください。きっと、あなたが気づいていないだけで、幸せなことは沢山あつたはずです。あなたはきっと、ちょっとした事で不幸と思い、ちょっとした幸せには気づいていないだけなんです。だから、自分に自信を持つてください。少しでも長く生きてください。もし、今あなたが自分のした事が間違っていたと思うなら、この先あなたと同じような人が出ないよう、あなたに出来るやり方でみんなを助けてあげてください。僕が言いたかったのはそれだけです。」

「佐伯先生に言われて、私は自分が情けないと思つた。自分の事しか考えずに、周りの事がよく見えない。私は自分が情けなすぎて、涙が出てきた。部屋から出て行こうとする佐伯先生を見て、私は泣きながら言つた。

「私・・・間違つていました。先生の言うとおり、私より不幸な人は沢山います。私だって気付いていなかつた訳じゃないんです！」

でも、抑えきれなかつた。私なんて幸せな方だと考えていたけど、

不幸な事が重なつて、自分が幸せだとは思えなくなつて、もう逃げたかつた。ダメだと思っていても、逃げ出したかつた。死ねば、このつらい気持ちから解放されると思うと・・・」

私は次の言葉を言うことも出来ずに泣き崩れた。佐伯先生は部屋から出る寸前で止まり、私の方を見て最後に一言だけ言った。

「あなたは幸せですよ。生きているんですから。死んでしまつたらそれで終わりです。人間、生きているという事が一番幸せなんですよ。」

佐伯先生はそう言い、部屋から出て行つた。私は、佐伯先生が部屋から出た後も、ずっと泣き続けた。心配した看護師さんが来てくられたが、私はそのまま三時間ほど泣き続け、その日を境に全く違う自分に生まれ変わつた。

あれから三年、私は仕事をしながら悩める人たちのためにカウンセラーを始め、私がしてしまつた過ちを他の人がしないように、いつも何十人の話を聞いている。今の私がいるのは、佐伯先生がいてくれたからである。あの時、佐伯先生ではなかつたら、私はこの場にはいなかつた。私は佐伯先生から言われたとおり、私が出来るやり方でみんなを助けています。

人が自殺する理由は沢山ありますが、自殺してしまうとその場で全てがリセットされてしまう。自殺に意味はない。死んでしまえば、その先にある幸せをつかむことができなくなつてしまつ。世界は広い、生きたくても食べるものが無くて死んでしまう人もいるのに、自殺するという行為はその人たちに失礼ではないだろうか？必死に生きようとしている人に対して、簡単に自分の命を投げ出してしまう。自殺する必要などない。死ぬ事を考える前に、一歳でも多く生きることを考えるべきではないだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3580d/>

命の大切さ

2011年2月2日23時38分発行